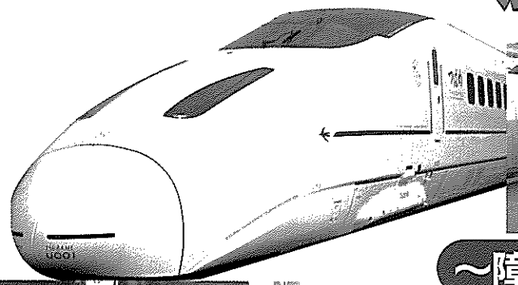
[特 集]

名所・旧跡を訪ねたり、
テーマパークで遊んだり、
旅にはいろんな発見や
感動があります。
そうした旅の楽しさを、
障害のある方とともに体験する。
そんな旅のプランを立てる時、
利用する交通機関や施設の
バリアフリー度が気になります。
今回は、ひまわり電車を
走らせる会の小旅行を通して、
バリアフリーな旅について考えてみました。

バリアフリーの旅をつくろう！



～障害者といっしょに楽しむ小旅行～

受付はノボリを立てわかりやすく

九州新幹線を使った旅　同行レポート

九州新幹線を利用して阿蘇までの日帰り旅行

昨年11月「ひまわり電車2004～新幹線の旅 in阿蘇ファームランド～」というイベントが開催されました。主催は、障害を持つ人の社会参加と相互理解をめざした活動を10数年続けている「ひまわり電車を走らせる会」。毎年1回障害者をサポートしての小旅行を企画しています。今回は九州新幹線開業にちなんで「つばめ」を利用した日帰り旅行です。参加者は、障害を持つ人とその付添い、ボランティア、それに実行委員と現地熊本でサポートしてくださるボランティアを加えて、総勢72名の旅となりました。

まず、鹿児島中央駅前の広場で午前8時30分からの受付。場所がわかりやすいようにノボリを立て、受付用の机が用意されていました。新幹線の出発時刻は9時45分。出発セレモニーや駅前広場から構内の待合所への移動時間、さらに待合所から新幹線に乗り込むまでの時間を考慮して、時間に余裕をもった時間設定になっています。また、全員の腕に黄色のリボンを付けるなど、参加者だとひと目でわかるような工夫も施されていました。

全員そろっての出発セレモニー

VOL.9 2005
福祉のまちづくり広報誌
ありば

CONTENTS

[特 集]
バリアフリーの旅をつくろう！
～障害者といっしょに楽しむ小旅行～ PAGE 1

ありば ヒューマンドキュメント
水流 宏美さん PAGE 4

ありば通心 PAGE 6
グループ「さんた」

バリアフリー最前線 PAGE 7
道の駅 いぶすき 彩花菜館（指宿市）
国道225号線　照国通り（鹿児島市）

ハードルを越えて PAGE 8
田中　仁さん

鹿児島県からのお知らせ
平成16年度「心の輪を広げる体験作文・小学生部門」最優秀賞 PAGE 9
池田学園池田小学校五年
岩元　恕文さん

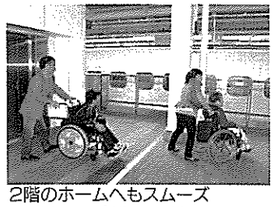
表紙イラスト　長丸　修一さん プロフィール

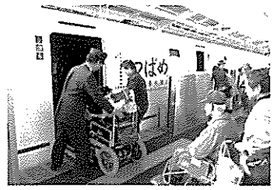
1972年横川町生まれ。横川町立安良小、横川中、加治木高校から鹿児島大学農学部へ進学。鹿児島大学3年の時に不慮の事故で、肩から下の運動機能を失った。2000年5月から独学で絵の勉強を始め、口に絵筆をくわえて主に風景画を描きつづける。2004年、社会福祉法人日本肢体不自由児協会主催の「肢体不自由児・者の美術展」で表紙の「猫柳とめじろ」が入選。「自然を描くのが好きですが、いつかは人物にもチャレンジしてみたい」と長丸さん。

駅構内および新幹線での移動では

広場から駅構内へのエレベーター

駅前広場から2階の構内待合所へはエレベーターを使っての移動。事前の下見、研修のおかげで、付添いの人やボランティアの介助はスムーズ。また、待合所からホームまでのエレベーター移動も、予め順序を決めた移動だったため、思ったほど時間もかからずホームへ到着。鹿児島中央駅は九州新幹線の始発駅ということもあり、新幹線に乗り込む際もスムーズでこれといったトラブルはありませんでした。新幹線車両は広い乗降口、段差無しなどのバリアフリー設計になっているので、車いすでの乗り降りもスムーズでした。


2階のホームへもスムーズ


ホームから車内へも楽々

今回のサポートをお願いした旅行代理店でも、移動や乗降など時間がかかると思われるところについては、事前に駅や鉄道の関係者と連絡を取り合っていたこともあり、九州新幹線「つばめ」は無事定刻に鹿児島中央駅を出発。ただ列車内もバリアフリー設計とはいえ、車いすでの移動の際、他のお客様と離合するのがちょっと大変でした。

快適な新幹線の車内

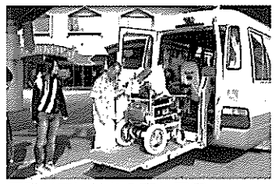
バスへの乗り換え、そして観光施設では

新八代駅まで約40分の新幹線の旅を終え、今度は貸切バスに乗り換えです。今回は通常タイプの貸切バスとリフト付きマイクロバスです。配席は余裕を持って座れるよう配慮されていましたが、狭い入口から障害者を背負って座席に運ぶボランティアの方々にとっては、いちばんハードな作業となりました。

バスの乗り降りは、ちょっと大変

新八代駅から阿蘇までは、当初予定していた時間を超えてしまいました。駅や休憩したドライブインで、トイレ休憩にかなりの時間をとられたためです。障害者用トイレの数に限りがある上、利用が一度に集中するため予想以上に順番を待つ結果となりました。

訪問先の阿蘇のファームランドでは各自自由行動。団体行動をはなれ、付添いの方やボランティアの介助者とともに、施設内で思い思いに食事やショッピングができる機会をつくっています。行き帰りのバスの中では、実行委員の方がガイド役になったり、ビデオを上映してくれたり、道中の演出にも工夫がなされていました。


電動リフト付きの車も用意

ボランティアがガイドになって

ファームランドでの食事のひととき

お互いのコミニュケーションもバッチリ

ショッピングも楽しい

◆今回の旅について、参加者の声をひろってみました。

- ●トイレの対応がむずかしかった。（ボランティアの女性）
- ●乗り物の乗り降りに一番気をつかいました。（ボランティア男性）
- ●新幹線、もう少し通路が広ければもっと楽。（車いす使用者）
- ●駅のトイレで介助してもらってうれしかった。（車いす使用者）
- ●どこでも障害者用トイレは1つだけ。（車いす使用者）
- ●障害者の旅行は年々増えています。（旅行代理店担当者）

バリアフリーの旅をつくるために

出発式の際に、旅の予定や注意点などを説明

事前の計画や準備を万全に

今回の「ひまわり電車を走らせる会」の旅行では、車いす使用者が実行委員長になって、交通機関や目的地の下見などを行い、無理のない安全性と参加者の要望のバランスを考慮して行程が計画されています。介助にあたるボランティアについても、今回が初めてという人を対象に、2回ほど事前の介護講習会を開催するなど、サポートをする側とされる側の顔合わせの場も設けられています。介護の技術だけではなく、障害者と介護者のコミュニケーションについても配慮されているのです。また、看護師や理学療法士の資格を持つ方の参加など、万が一のサポート体制にも配慮。無理のない計画と万全な準備が、バリアフリーな旅の第一歩といえます。

ゆとりをもったプランで、ゆっくりのんびり

先発隊と旅のプロのアドバイス

団体での移動に便利なのがバス。でも、やっかいなのは渋滞。定期的にトイレ休憩が必要な障害者にとっては深刻です。ひまわり電車を走らせる会では、乗用車の先発隊を先回りさせ、道路や施設の混み具合などを後続のバスの方へ逐次連絡、臨機応変に対応するという方法を採用。また、鉄道利用に関しては、旅行代理店を通して、なるべく乗降口やトイレに近い座席の確保を依頼するなど、乗り物や駅構内のスムーズな移動に配慮しています。

事前に連絡していたので乗降もスムーズ

先発隊からの報告を受けてバスも発進

旅の楽しさを味わってもらうために

乗り物が好きだったり、観光地でのショッピングが好きだったり、旅の楽しみは人それぞれ。中でも旅先で出会った人々とのあたたかい「ふれあい」はいつまでも印象に残ります。介助する人、される人、この出会いもそのひとつ。たとえ立場は違っても、同じ旅人としてお互い接することができれば、素敵な旅となることでしょう。

お互いにいろんな発見がある

思い出をたくさんつくって楽しい旅に

ありば ヒューマンドキュメント

達成感が次への意欲になります。

[水流（つる） 宏美（ひろみ）さん]

すべてに前向きな宏美さん

歩いては骨折を繰り返した

2004年9月、水流宏美さんは鹿児島県障害者雇用支援・激励大会で、障害を持つ人へのメッセージとしてこう語った。

堂々と胸を張って前向きになるということが自立への一歩だと私は思います。

自立というのものは、自分一人で生きていくという意味ではありません。

周りの方々に、支えてもらうという勇気を持つことが必要だと思います。

"堂々と胸を張って前向きになる。"ということのむずかしさ、つらさを味わい、それに打ち勝ってきた水流さんだからこそのメッセージだ。

彼女は1982年、役場勤めの父とそこで補佐的な仕事をこなす母の長女として誕生。逆子だった。生まれつき左足の骨が極端に細く、常にギプスがつけられていた。左右の足の長さが違うので補装具なしには歩けなかった。「1歳と3ケ月の頃に初めて手術をし、一生治らないと宣告されました。もちろん、私は赤ん坊でしたから、そのことは後になって知りました。自分はほかの人とちがう、障害者なんだと気づいたのは、小学校に入ってからあとでした。」4歳の頃、補装具をつけてもらい、あちこち歩けたものの、骨が弱いので骨折しては入院を繰り返す。5度目の骨折が原因で、せっかく入学した小学校も半年で転校することになり、鹿児島市にある養護施設へ。「親元を離れて暮らすさびしさは、つらかったですね。月に1度帰省できるんですが、また学校へもどる日が来るのがいやでいやで、泣いてばかりいました。それでも、なんとかそのつらさに耐えられたのは、同じ境遇の友だちがまわりにいてくれたから…」。

自力で山頂へ、自分の役割を実感

養護施設から肢体不自由児施設の県立整肢園を経て、地元の小学校に復学。まわりを見るとみな健康な友だちばかり。みんなの視線が気になって引きこもりがちになる自分。そんな中で、担任の先生が「みんなといっしょに登ろう」と5年生と6年生の合同登山遠足に誘ってくれた。辻岳という根占町にある山の頂きをめざして、母に付き添われながらの登山。みんなより早めにスタートしたのに、途中でどんどん抜かれた。でも、初めて自分の足で登りきる。その感動は、その後の水流さんの前へ前へと進むエネルギーとなる。6年生の時、「宏美ちゃん、どうね」とバレー部の友だちが部活に誘ってくれた。マネージャーという役割だったけれど、時にはピンチサーバーとしてコートにも立った。よそのチームの子たちとも友だちになれた。「バレーを始める前まで、本当に弱虫で母を困らせてばかりだったんです。でも、友だちとスポーツの楽しさ、勝ち負けの喜びや悲しみを分かち合うことで、すいぶん成長したように思います。」と水流さんは当時を振り返る。

「それと、小学校の思い出で忘れられないのは運動会の親子リレーです。」と声が弾む。下の弟が先に走って彼女へバトンタッチ、4分の1周を彼女が走って母へ。これまで運動会といえば見学ばかりだったのが、初めて校庭を走ることに。バトンをつなぐことで、自分が「役割」を担えることを実感した。家族の思いやりと、まわりの温かい声援が身にしみた。

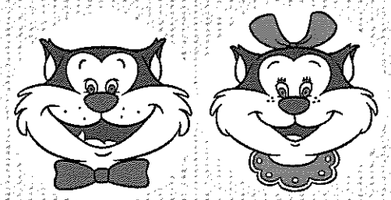
今度は支援・指導する立場に

中学校でもバレー部に入りマネージャーを務めた。卒業後、県立大隅高校情報処理科へ入学する。コンピュータ利用技術2級の資格などを取得し、パソコンを使った仕事への夢が膨らんでいく。「実は、料理やお菓子を作るのも好きだったんです。将来そういった道へ進みたかったのですが、調理人やケーキ職人は立ち仕事ですから、足に障害のある私にはちょっと無理かなということでパソコンの道を選びました。」さらに技術を高めようと、彼女は薩摩川内市（旧入来町）にある鹿児島障害者職業能力開発校へ進んだ。県の障害者技能競技大会のワープロ部門で金賞にも輝いた。ところが、第二の試練が彼女を襲った。「水頭症」という病気で緊急入院。術後の体調が思わしくなく、内定していた就職も辞退を余儀なくされる。

しかし、病を克服したあとの彼女は持ち前の明るさと前向きな姿勢で、自分の夢に向かって進んでいく。病院で一緒だった人に『愛・あいネット』というグループを紹介された。鹿屋市を拠点として活動している福祉支援ネットワークで、いろんな障害を持つ人がCAD（コンピュータを使った設計システム）による図面作成、電子データ化、名刺・チラシ・ポスターの作成などを行っている。2003年8月にはNPO法人として認証された愛・あいネットで、水流さんはパソコンに向かいながら語る。「今までいろんな面で支えてもらったので、今度は自分が支援・指導する立場としてやっていきたい。それには、もっともっと自分の技術を高めていかないといけませんが。」瞳がきらりと輝いた。

ミーティング

ドライブが大好き！



DESIGNED BY ROBERT MOORE
© ai・ai net

前向きに生きていこう そうすれば自分が変わる。

パソコンで仕事をテキパキこなす